

椎間板ヘルニア

Hernia of Intervertebral Disc

椎間板とは頸椎(首の背骨)から尾椎(尾っぽの骨)の骨と骨の間に存在する構造物で、衝撃をやわらげ骨と骨をつなぐクッションのような役割をしています。

椎間板ヘルニアとはこの椎間板構造物がヘルニアを起こして突出してしまい様々な脊髄障害を起こす疾患です。その位置や状態によりいくつかの型に分ける事ができます。

原因

軟骨形成異常犬種では椎間板の構造的な遺伝が示唆されます。その他、激しい外部からの衝撃や慢性的な圧力(肥満などによる)、加齢、脊椎の長さはこの疾患の発症リスクを高めます。

症状

症状はどの位置の椎間板にヘルニアが起こるか、どの型のヘルニアが起こるかにもよりますが、軽度の場合は動きたがらない、後肢がふらついてすぐに立てなくなる、四肢や後肢の不全麻痺などが見られます。

重症になると、四肢や後肢が麻痺し、激しい背骨の痛みがみられるもしくは痛みさえも感じないことがあります。また排尿や排便の失禁が起こることもあります。



椎間板ヘルニアによる後肢麻痺を見る▲

診断法

犬種や問診、症状、神経学的検査などから推測することができます。その後レントゲン検査を行い、病変部位が特定できるか確かめます。犬で最も多いのは最後の1~2番目の胸椎から最初の1~2番目の腰椎にかけてが最も多いものです。その他として他の腰椎や頸椎で起こることもあります。

確定診断を行うには脊髄造影検査といって造影剤を注入してのレントゲン検査を行いますが、現在では可能であればCTやMRI検査のほうがより安全で確実に診断できますのでそちらに取って変わられようとしています。

治療法

治療には内科療法と外科療法がありますが、内科療法は早期、軽度の場合の適応となります。ケージ等に入れ安静(最低2週間~4週間)にし、ステロイド剤を投与したり、時にはレーザー療法が行われることもあります。

内科療法で改善が見られないとか、麻痺が重度の場合には外科手術を行います。手術法にはヘルニアの位置や型により、腹

側造窓術、片側もしくは背側椎弓切除術、減圧術など様々な方法があります。

外科手術後はリハビリテーションを行い、機能回復を助ける必要もあります。不幸にして回復の見込めない重度の損傷を受けた場合はリハビリや車いすを用いて生涯ケアしていく必要があります。

自宅での看護法

獣医師の指事にしたがってケアしてあげてください。リハビリテーションは自宅でする機能回復に重要なケアです。水泳などを応用するといいいでしょう。詳しくは主治医の先生と相談しながら正しい方法で行いましょう。

予防法

軟骨異常犬種を飼育する場合には、階段の上り下り、全力疾走などで激しい運動は控えるようにしましょう。また肥満はこの疾患のリスクを急激に高めます。ウエイトコントロールには十分注意しましょう。

メモ

軟骨形成異常犬種であるダックスフンド、ペキニーズ、バセット・ハウンド、ビーグル、フレンチ・ブルドック、ウエルシュ・コーギーは若齢で特に発生が多いので注意が必要です。

この病気は症状が発症してから最初の24~48時間がその後の治療効果を分ける重要な時間とも言われています。上記の犬種でどうも動きや歩き方がおかしいと思ったら早期に獣医師の診察を受けるべきです。

幸いにして回復しても他の部位に再発することも多いので日頃から注意が必要です。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..